



待春や海見るばかり小半日
初桜湯の花通り湯が流る
玉椿献茶の叔母が面影に
松川の芽柳瀬音が澄みてくる
海を見て葉書を書けば春の曲
きさらぎの海女屋の寿司は涛こもる
若草の生命したたか詩を書かな



哀 歡 抄 (十四)

尾崎 文英 ぶんえい

友の死は元日すでに暮れにけり
にわかなる牡丹雪ぞと身をさらす
わが生命ほとけのいのち水仙花
安針の伊東を尋ぬ春浅し
春暁の巨大魚見たりなぎさ橋



